

平成12年 第73回～第83回



第73回 おなじみのキングレコード・スーパーアナログレコード
プロデューサー高和元彦さんの「祝2000年ニューイヤー コンサート」
風景



第76回「マレーネデートリックの多彩な顔」
シネファッション評論家 高橋暎一さんの懐かしい映画音楽特集。



第75回 超絶アナログ再生による「鬼太鼓座のすべて」
耳が勝つか、オーディオが勝つかの真剣勝負、3メートル余の
大太鼓が会場一杯に炸裂した。



第75回 大太鼓の音に、会場のガラスは大丈夫なのか、とい
ささか心配気味の細田社長。

第76回 中平さんが撮られたジャイアンツ達の貴重なショット。



第76回 新宿ライブハウスDUGのオーナーで、写真家でもあ
る中平 瑛瑠さんの熱弁。





第77回 天才，長岡鉄男さんの手作りスピーカー傑作選，「こんなスピーカー見たことない」
残念ながら長岡さんの体調が優れず、フォステックス クラフト社の浅生昉さんの代理出演となった。



第78回 ライブコンサート「燦めきのラテン・特集」
誰でも知っているラテンの名曲に心躍るひとときでした。
出演はカルロス飯田とトリオ「グスト ラティーノ」の皆さん。



第80回「日本のステレオ初期クラシックLPをきく」
若林さんがご自身で録られた70年代のLPと、新しいCDを比較
するという試み。LPレコードの勝ちでした。



第83回 長岡鉄男さんのご遺族の好意で、遺作となった
数々のスピーカーのオークションが本会で行われ、その売上げ
が全額チャリティされました。感謝。

第82回「懐かしの戦前欧州ヒット曲特集」
大森茂さんの貴重なコレクションに感動し、挨拶される市川取締役。



超絶! LPレコード再生による「鬼太鼓座のすべて」



▲写真左が司会・進行を務めるオルトフォン ジャパン御前園俊彦社長。右側は、ビクターエンタテインメント株の制作、録音スタッフのみなさん。作品ごとの制作秘話や録音の苦労話は実に面白く興味深い。

「20世紀の大切な文化資産であるアナログ・レコードの灯を消してはならない」とオルトフォン ジャパン(前園俊彦社長)と千代田テクノ(細田敏和社長)の共催で始まった、月1回の「LPレコードによる千代田チャリティ・コンサート」も早8年目を迎える。3月15日午後6時、東京・湯島の千代田お茶の水ビル・エントランスホールで開催された第75回目は「鬼太鼓座(おんでござ)のすべて」と題され、約70人ほぼ満席の音楽ファンが、和太鼓演奏でユニークな活動を続ける鬼太鼓座の第1回録音作品から最新のアナログ・レコードまでを、制作スタッフによる詳細な解説付きで楽しんだ。

数多くの和太鼓演奏グループの中でもこの集団は異色の存在と言われている。「和太鼓の持つ生命力」を世界に発信し続けている彼らは、独自の哲学のもとに演奏を行っているからである。それは今から25年前、アメリカでボストン・マラソンを完走した後、そのままの姿でゴールの傍らに用意された舞台に駆け上り、身の丈を越す大太鼓を息ひとつ乱すことなく打ち続けた姿に象徴されている。リーダー・田氏の唱える「走る事と音楽する事は一体であり、それなくして和太鼓の演奏は有り得ない」という、鬼太鼓座ならではの「走楽論」を本気で実践する彼らは、やがてアメリカをマラソンで走破、パフォーマンスを続けて人々を驚嘆させ

た。鬼太鼓座の演奏は、和太鼓の持つ音の迫力やビジュアル的なインパクトで見る者を惹き付ける。極限まで鍛え上げた躍動感あふれる彼らの肉体系や圧倒するサウンドは、多くの人々の度肝を抜くと同時に、圧倒的な支持を得て、ファンが増え続けているのである。

今回のコンサートは、この鬼太鼓座の音を録り続けているビクターエンタテインメントのスタッフの方々を講師に、「鬼太鼓座のすべて」を音と映像とトークで再現することを目指したものだ。毎回プログラム内容によって細かく再生装置のアウトラインが変更され、ベストの音が聴かれるのがこのコンサートの売り物であるが、今回は特に「耳が勝つか、スピーカーが勝つか」という挑戦的な試みだ。カートリッジは話題のオルトフォンMC Jubilee、アンプはブリ、パワー共に手作りの真空管式(パワーアンプは超弩級3極管845PP)が使用され、スピーカーにはB&W Nautilus801が選ばれた。歴代のLPレコード制作スタッフによる興味尽きない録音裏話を交えながら聴く数々の鬼太鼓座レコードの音は、真

に魂を揺さぶられる迫力のあるもので、中でも札幌コンサートホールで録音された最新の「怒濤万里」のラッカー盤再生は鬼気迫るものがあり、聴衆は身動きするいとまもない感動に包まれた至福のひとつを過ごす貴重なコンサートであった。

さて、次回第76回は、ジャズが登場する予定だ。新宿の有名なジャズ喫茶“DIG”とジャズ・スポット“DUG”のオーナーである中平穂積氏を講師に招いて、めったに聴けない貴重なお宝LPを鑑賞するという、ジャズ・ファンにとっては見逃せないプログラム。中平氏と偉大なジャズ・プレイヤーたち、たとえばマイルス、コルトレン、ホレス・シルバーなどとの、心温まるエピソードもふんだんに聞けるという、楽しみなコンサートでもある。また、オーディオ的には、古いモノラル・レコードがステレオフォニックに響くユニークなDSP装置が実験的に登場するのも注目される。



▲プレイヤーを操作する前園社長。大型スピーカーによる会場を揺るがすような大太鼓の響きも、ハウリングひとつ起こさずに堂々と再生するのはさすがだ。プレイヤーは同社が輸入販売しているスタービ社の製品を使用した。

し、一般ユーザーの目に触れる形のもの少ない。たとえば、サントリーのホテル運営、美術館運営のような事業を展開している電機メーカーは少ない。

ユーザーに直結したビジネスを展開しながら、なぜもつと公共的、恒久的一般ユーザーの目に触れる社会事業ができないのか。

創業者から三代 パイオニア音楽教育の振興

地方への工場建設や海外進出が即地方や後進国の経済と雇用支援につながっている、という考えもある。が、国内における地方進出も、海外への生産シフトも、実のところマーケット・インや安価な労働力確保が企業本来の狙いで、結果的に地方のタメになったり、後進国の経済発展に役だっているにすぎない。

そのなかで私が好ましく思っているのは、パイオニアが支援している(財)音楽鑑賞教育振興会のことである。

同社が創業三十周年の記念事業として昭和四十二年に始めたもので、ことし三十二回目を迎えた。

この間、音楽鑑賞作文・論文を小中、高校生、一般、教師から求め、三十二年間に約三十七万通の応募をみている。

それだけではなく、音楽を担当する教師の講習会、研修会も実施しており、昨年度だけで四千名もの参加があった。

財団の理事長をつとめている松本冠也氏(パイオニア(株)会長)は「このコンクールのように、作文を通じていまの教育に必要な、自分の感動や心の動きを素直に文章化していく、という内容をもった事業を推進しているのはこの財団だけで、貴重な存在と自負している」と語っているが、歴史においても、現在約七百八十財団のうち五百六十財団は昭和四十八年以降の財団だからその点でも貴重な存在になっている。

財団を支援するパイオニアはここ数年業績が低迷、加えて長いゼロ金利時代で財団の資産運用にも厳しいものがあるようだ。株主配当や短期の業績を最優先するサラリーマン社長ではとても継続は難しかっただろう。創業者・松本望氏(故人)に続いて、長男で三

代目社長の松本誠也氏(故人)、次男の松本冠也氏(会長)が遺志を引き継いでいるから続いているとも言える。

学校の荒廃が叫ばれているなかで、情操を育くむ音楽鑑賞教育が果している役割には図り知れないものがあり、その社会性は一企業の事業を超えて大きい。

社会貢献度が 株価に評価されている

ビデオの普及が主目的だったとは言え、ビクターの「ビデオフェスティバル」の歴史も長い。近く二十三回目の応募が始まる。放送用を除けば、8ミリが主流だったポータブルの世界に、VHSが登場して、一般にも画づくりへの関心が広がった。ドキュメントに始まり、ストーリー性の濃いものなど、年代は広い。DVCの時代を迎えてさらに火が付き、ポケットに入れて気軽に海外に持ち出すようになり、高齢者からの応募が増えていく。

応募総数は累計で二万数千件。半分が海外からの応募である。時間に余裕の出来た熟年世代からの

応募が多いのは当然としても、最近の傾向は二十代の若者からの応募が四〇%と増えていること。女性からの応募も二〇%を占めている。モノをみつめ、記録し、残すことは社会をはじめ自分の歴史を刻み込むことである。こうした事業が、一企業によって地道に二十一年も続けられていることは貴重で、パイオニアの音楽鑑賞教育同様極めて社会性が高い、と言わなければならない。

企業は利益を出すことで社会に貢献していることは確かだが、もつと積極的に、一般のユーザーに見える形で社会貢献がされている。最近ではITとリストラを口にしていけば株価が上がる時代だが、当該企業がどれだけ社会貢献をしているか、が株価の目安になっている。株は一種のギャンブル、良く言えば投資で、いかに利潤を上げるか、将来どれだけ成長が見込めるか、によって決まる。

願わくば、企業の社会貢献度リンクを発表する研究機関が生れ、これを競い、賞賛する土壌が生れないものかと思う。

視点

論点

社会貢献度を競え

本社長 藤原隆司

メーカーの社会貢献を考える

日立、東芝、三洋など
大きなフシ目を迎える

ことは東芝が創業百二十五周年、日立が九十周年、三洋電機が五十周年、三菱電機が2001年に八十周年、を迎えるなど、それぞれの会社が大きなフシ目を迎える。東芝、日立などは二年前の松下電器（八十周年）の例にならって記念商品を出していく考えである。三洋電機は少し変わった事業を推進する。本社新ビル（99年八月）、記念館の建設（2002年二月オープン）は内輪の事業として、

二十一世紀のクリーンエネルギーを象徴する世界最大の太陽光発電システム（メガソーラー）を建設する、というのである。

総工費六十億円、年間発電量は約三七〇MWhになるが、発電した売上げはエネルギーと環境との共生に役立てるのだそうだ。

実際、どのような事業を支援していくか明らかではないが、メガソーラーが稼働すれば、CO₂の削減効果が年間約六百七十万トン（炭素換算）、森林面積（CO₂吸収量換算）で約七百万m²、石油節約量にして年間約九〇〇*_ポに相

当する。これを一般家庭の年間消費電力量に計算すると千二百世帯分を賄うことになるという。

なぜ公共的、恒久的
社会事業が生まれないのか

規模は小さいながら、私が気に入っているチャリティコンサートがある。

原子力関係の事業で特異な存在の㈱千代田テクノル（細田敏和社長）と、ピックアップやアンプで永い伝統を持つオルトフォンの日本人・オルトフォンジャパン㈱前園俊彦社長が共催し、月に一度千代田テクノル一階エントランスロビーで開かれていたものだ。音響空間としては決して理想的とは言えない、五十人も入れれば

いっばいの会場だが、ゲストだけは前園社長らの人脈と努力で超一級。クラシックからオペラ、ジャズ、フラメンコ、フォルクロレまで、斯界の第一人者が手弁当でかけつけてくる、貴重なもの。

当初は三年くらいをメドにスタートしたこのチャリティコンサートも八年目、八十回になんなんとしている。前記の両者が共催とは言いながら、実質は細田社長と前園社長の献身的な努力で続けられている。企業の社会貢献というよりも個人的なボランティアの意味合いが濃い。

各メーカーには社会関連の事業を担当するセクションがあり、直接企業利益に結びつかない事業への支援などを行なっている。しか

長岡鉄男氏の傑作スピーカーカーでレコード聞き比べの楽しさに酔う

世は「革命真つ只中、音楽を取り巻く環境も大きく変わろうとしているが、アナログレコードによる音楽コンサートが根強い人気が続いている。『千代田テクノル主催、オルトフォンジャパン共催で毎月行われている「千代田チャリティーコンサート」は、5月24日の開催ですすでに77回を数える。

普段雑誌でしかお目にかかれない傑作スピーカーカーが勢揃い!

今回は「こんなスピーカー見たことない」と題し、ユニークで優れたスピーカー作りで多くのファンをもつオーディオ評論家長岡鉄男氏のオリジナルスピーカーによるレコードコンサートとなった。普段雑誌でしかお目にかかれない同氏設計の傑作スピーカー4セットが、アナログ音楽ファンの前に集められた。主催する『千代田テクノルの細田社長は「以前からスワンだの、フラミンゴだのというユニークなスピーカーを作る長岡先生のスピーカーを聴いてみたかった。今回はレコード再生による聞き比べができる今までにないコンサート」と挨拶。名演、

名曲をレコードで振り返り、音楽鑑賞の喜びを分かち合う千代田チャリティーコンサートの試みに新しいページを加えた。当日は、長岡氏自らの言葉で自慢の

スピーカーを解説してもらおう予定だったが、体調を拗らせたとのことで、同氏が会場に迎えられなかった(同氏はイベントから2日後の5月29日急逝された)が、会場にはその存在感あるユニークな長岡スピーカーが居並んだ。ジャズや邦楽など雰囲気異なる3枚のレコードを次々に再生し、スピーカーのの違いによるサウンドの違いを聞き分

今回も会場一杯の来場者

あるユニークな長岡スピーカーが居並んだ。ジャズや邦楽など雰囲気異なる3枚のレコードを次々に再生し、スピーカーのの違いによるサウンドの違いを聞き分



長岡氏設計の傑作スピーカーはどこか頼もしい



NGO から千代田チャリティーコンサートの活動に感謝状が贈られた

けられるオーディオ的アプローチに会場は大いに沸いた。コンサート終盤には、会場から「宇多田ヒカルのおートマチック」が聴きたい」などのリクエストもでて、レコード再生層の広さもかいま見せた。また、今回はこの千代田チャリティーコンサートで集められた寄付に対し、NGO「地球と子供の未来のために2050」から、お礼の感謝状が贈られた。月一回の地味なレコードコンサートながら、音楽と社会があたたく結ばれ始めていることを伝えていた。